

[制作記録]

発酵建て藍染による紬織着物の制作

Production of Tumugi Kimono with Fermented Indigo Dyeing

足立 真実
ADACHI Mami



(写真1) 発酵建ての藍で染めた絹糸

はじめに

紬織着物を制作する過程で天然染料による染色を行っている。植物を煮出した液に絹糸を浸し、木灰や鉍物による媒染で色を定着・発色させるのが基本の工程だ。熱をかけない特殊染めの一つに藍染がある。蓼藍の葉を発酵させた薬を還元することによっ

て染め付ける。中でも本藍染といわれる発酵建ては薬の状態の見極めや還元させるための灰汁¹・貝灰・フスマなどを継ぎ足すタイミング、温度管理、など調整が難しい。本学の染織コースには発酵建てのための設備があり薬からの藍染を行っており、プロセスを学ぶと共に研究として自身の制作に活用している。その内容と成果を報告する。

藍を建てる

藍の染料成分であるインジゴ（不溶性）を還元させ青に染める液（水溶性）をつくる過程のことを「藍を建てる」といい、発酵建てと化学建ての方法がある。薬品で一時的に還元させる化学建てとは違って、発酵建ては還元菌が増殖し還元酵素が育成・活性するように必要な栄養源や水温・phの数値などを日々記録観察し環境を整えなければならない。工房にいる発酵菌や気候などによって発酵状態は常に変化する。また藍液の匂いや色、手触りなどの感触で調子を判断するため管理維持には豊かな経験と直感が求められる。

本研究での藍建ては下記の方法で行った。

- ・細かくすり潰した薬10kgに灰汁を足しペースト状になるように練る。
- ・藍甕に移しph12.0になるようさらに灰汁を足す。水温は約30℃に設定し発酵を促進する。
- ・その後、数日間はphが下がっていくのに合わせて灰汁を足していく。ph11.0になれば貝灰を入れ一度アルカリ数値を上げ徐々にphを下げる。
- ・発酵が進むと攪拌した後に大きな泡の塊「藍の華」が液面に残る。発酵が安定し還元状態となり、染められる状態となる。
- ・毎日1回攪拌し、発酵が弱くなったらフスマまたは貝灰を追加して調整する。



(写真2) 染織コースの2基の藍甕



(写真3) 薬

総・緋の藍染

染めるときは被染物を約4、5分間藍甕の中に浸し、その間まんべんなく行き渡るよう液の中でゆっくり広げるように練る。制作に使用する絹糸の状態は1周が1.27mの総で染める場合と、緋²文様を表すために部分的にビニールテープで括りを施し防染して染める場合がある。総では液の中を泳がせるように全体を広げて均一に染めることができる。一方、緋のための染色は反物幅の緯糸あるいは約20mに整経³した経糸を染めやすいようにまとめるのだが、緋の模様によって括りの面積が不均一なため全体が同じ条件にはならず染めムラが生じてしまうことがあった。



(写真4) 藍の華

藍染めは液に浸す時間が短いので、ムラなく染まる状態にする事前の工夫が必要であることを痛感した。ムラに染まった糸で織ると布面にもまだらな色で現れてしまうが、グラデーションや暈しに織り成す場合は模様の変化として利用でき、ムラ染めが有効な場合もある。いずれにせよ緋に括った糸を染めるためのより良い方法を模索したい。

紬織着物の制作

染め得た数色の藍の糸をグラデーション・格子模様配色、または緋を施し、紬織着物「彼方」「青の響」「雪の窓」「雪の彼方」「青の窓」を制作した。それぞれを公募展に出品した。

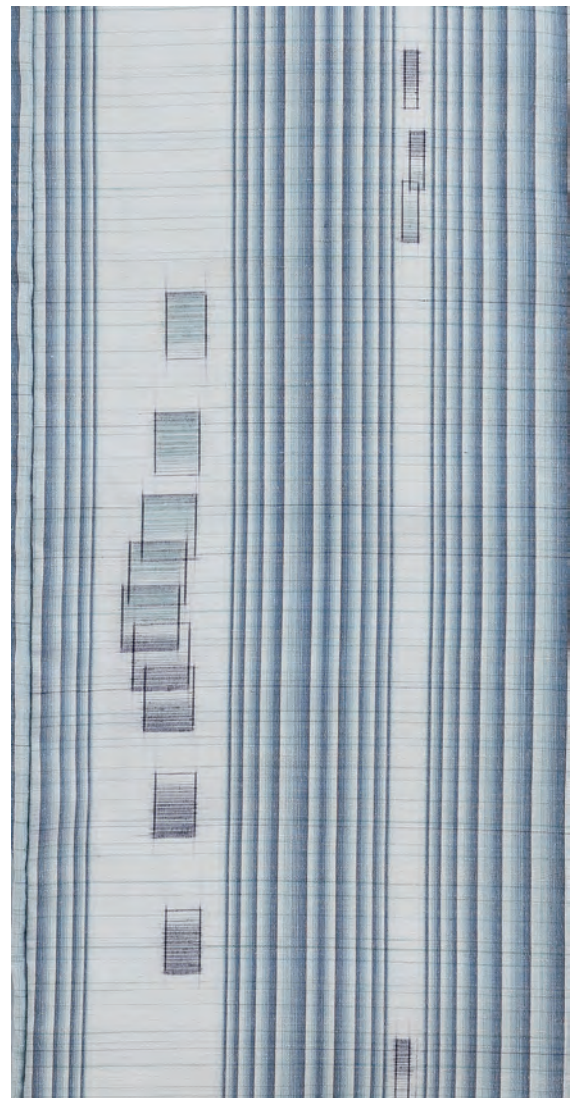
これから

染織コースには270ℓ容量の藍甕が2基あり、毎年2年生が薬からの藍建ての仕込みをし、実際に染めて課題制作にも取り入れている。発酵建ては本学卒業生の藍染作家である弘田朋実氏の協力を基に行った。

藍の染められる期間は年によって違い、半年で染まらなくなった年もあれば、薬を継ぎ足して6年間生き続けた藍もあった。新しく建てたものとは色も匂いも違う年季の入った藍甕から、涼しさをたたえ味わいのある水色を得ることができた。その藍も今年ついに力尽きた。発酵させてから染まらなくなるまでの1サイクルが藍の一生だが、薬や栄養分を継ぎ足し調整して生き延ばした状態は例がなく、引き継がせていただいたことは大変貴重な経験となった。代々携われた方々に深く感謝するとともに経験をこれからの藍の研究に反映させ、2基の藍甕を有効に使用して育てていきたい。また生き物と接するように藍と対話し顔色を窺いながら、水色から濃紺までの青を染める、この経験を重ねることから生まれるマニュアル化できない直感的なものを私の感覚に植え付けていきたいと思う。



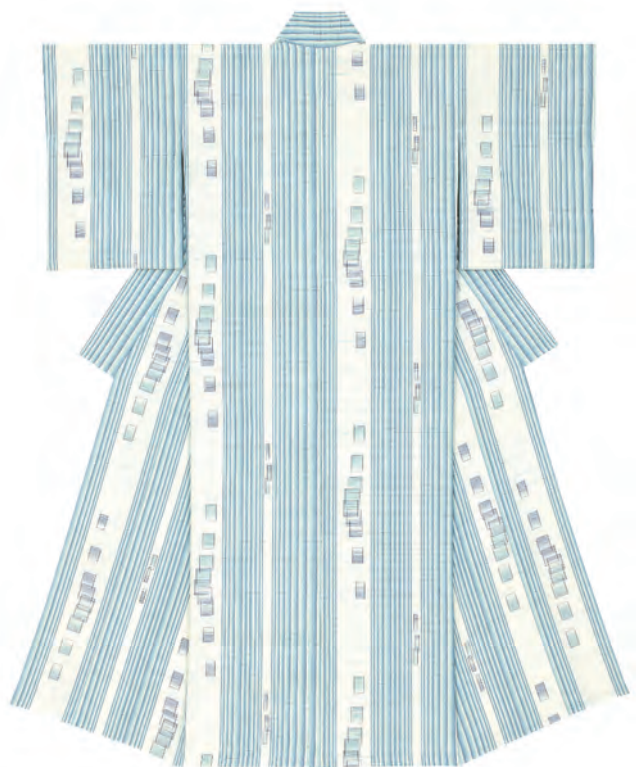
(写真5) 緋を施し藍で染めた緯糸



(写真6) 紬織着物「青の響」の部分
藍染の経糸によるグラデーションの配色と緋の表現



(写真7) 紬織着物「彼方」 2018年
藍、矢車附子の染



(写真8) 紬織着物「青の響」 2020年
藍、コチニールの染



(写真9) 紬織着物「雪の窓」 2018年
藍、コチニールの染



(写真10) 紬織着物「雪の彼方」 2019年
藍、コチニールの染



(写真11) 紬織着物「青の窓」 2020年
藍、臭木の染

註

- 1 灰汁 あく 木灰を水で抽出したアルカリ性の液
- 2 拵 かすり 織糸に染加工を施して文様を現す拵糸を作り、これを織って布面に文様を織り出した織物
- 3 整経 せいけい 織機に仕組むまでの工程で、総本数の経糸の長さ・張力を均一に規整すること

(あだち・まみ 工芸科/染織)

(2020年11月5日 受理)